

## 第7回マネジメントセミナー開催

# 『希望格差社会と潜在する社会不安に どう対応するか』

講師：東京学芸大学教授 山田 昌弘 氏

7月5日(火)メルパルク YOKOHAMA にて「希望格差社会と潜在する社会不安にどう対応するか」という演題で、「パラサイト・シングル」の生みの親である東京学芸大学教授の山田昌弘さんをお招きしご講演をいただいた。



てもしなくても同じだと感じる時に生じる」と言っているように、人が置かれている環境、幸福感が増すような環境ができるかどうかで決まるのだ。

この原因は、経済構造の変化、「ニューエコノミー」の浸透によるものである。ニューエコノミーとは、我々の生活をますます便利にするというプラスの側面と、職業を不安定化させ生活の見通しが立たなくなるというマイナスの側面を併せ持つ。快適・便利・安いという消費者の欲望を原動力とするもので、消費者の要望に応えるための効率化により、消費者の立場では王様に、生産者の立場では奴隷となる。ニューエコノミーにより、生活の将来見通しが立たなくなり、希望を失う人が一気に増大し、様々な問題が発生しているのだ。

### 90年代後半より始まる社会の不安定化

日本社会は経済的にも社会的にも90年くらいまではうまくやってきたが、90年代後半くらいから自殺者や児童虐待が急増、若者の失業やフリーター・ひきこもり・ニートなどが社会問題化するなど、日本の社会が不安定になってきた。若者を対象にしたアンケートでは、「今より豊かでなくなっている」と答える若者が6割以上で、将来生活の見通しを持ってなくなっている。

不安定化の要因としては、どうも「希望」というのがキーワードになっていることが分かってきた。希望は気の持ちようの問題ではなく、Nesse,R. “The evolution of hope and despair” Social Reserch 1999で、「希望は、努力が報われると感じる時に生じる。絶望は、努力し

### ニューエコノミーが雇用に与える影響

オールドエコノミーとは、ものづくり経済の中で男性の多くがOJTで仕事に熟練し、終身雇用・年功序列で収入が増大する社会をいう。これからのニューエコノミーは、将来が約束された中核的・専門的労働者と、使い捨て単純労働者への分化が進行する。つまり生産性の「高い人」と「低い人」の格差が拡大するのだ。

### 不安定化が若者に与える影響「希望格差社会」

戦後の安定した社会は「努力保証社会」であった。誰でも努力が報われることが保証された。若者は希望をもって学校で勉強し、仕事に励み、子どもを産み育てられた。途切れなくどこかの集団に属し、そこで自分を評価してもらえた。

しかし、ニューエコノミーが生活に与える影響として、中間集団・システムが「努力を保証しなくなる」。努力して勉強して学校を出ても「無駄」という経験が深まる。仕事でがんばっても評価されない職が増える（フリーターが典型）。生活の見通しがたたない若者は将来生活に希望がもてなくなり、経済的に安心して子どもを産み育てられないから結婚・出産を控える。子どもにお金をかけても期待通りいかない。努力が報われる人と報われない人に二極化し、「希望格差社会」の到来となるのだ。

#### 今、何ができるのか、すべきなのか

この問題を解決させるには、速やかなる総合対策が欠かせない。現実を放置すれば「使い捨てられる」と思う人々の大量発生を産む。終身雇用、年功序列を期待できる経済に戻れないなら、すべての若者が「努力が報われる」ことを実感、保証できるニューエコノミーに適合した「努力保証社会」を再建する

しかない。教育分野であれば、勉強という努力が仕事や昇進に直結する仕組みに、職業分野であれば、すべての人にキャリアアップの保証を、家族分野であれば個人を単位とした絆を作りやすい制度といったように、少しずつでも公共的取組みを進めていくべきである。

(文責 事務局)

山田教授には、豊富な事例やデータをもとにたいへんわかりやすくお話いただいた。参加者にとって、今回のテーマは普段時間をかけて考えていないことを指摘されてのことか、アンケートではほとんどすべての人が「参考になった」と答えた。印象に残った点でも、「努力を認め、報いられる保証、希望をかなえる環境が重要と感じた」や、「消費者（王様）と生産者（奴隷）の同居に複雑な心境」など、問題提起として「考えさせられた」とする意見があった。

#### 山田昌弘（やまだまさひろ）氏プロフィール：

現在、東京学芸大学・教育学部・教授（専攻：家族社会学・感情社会学）

愛情やお金を切り口として、親子・夫婦・恋人など人間関係を社会的に読み解く試みを行っている。「パラサイト・シングル」の生みの親で、精緻な社会調査をもとに「学卒後も親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者＝パラサイト・シングル」の実態や意識について分析した著書「パラサイト・シングルの時代」（ちくま新書、1999年）は話題を呼んだ。1990年代後半から日本社会が変質し、若者の多くから希望が失われていく状況を「希望格差社会」と名づけ、現在、議論を巻き起こしている。著書は「パラサイト社会のゆくえ」（ちくま新書 2004年）、「希望格差社会」（筑摩書房 2004年）など多数。現在、内閣府国民生活審議会委員、内閣府男女共同参画会議専門委員、東京都児童福祉審議会委員など、公職を歴任している。